

# 「汝の若き日に」(2006年度創立者記念日講演)

竹 中 正 夫

## はじめに

みなさんおはようございます。毎年この青葉の薫る頃、本学院は創立者タルカット先生(Miss Eliza TALCOTT)、また共同して神戸女学院をつくられましたダッドレー先生(Miss Julia Elizabeth DUDLEY)をしのんで、「創立者記念日」ということで、集いをもっております。わたくしは去年(2005年)もお招きをいただいておりますが、今年はおもに資料に書きましてのようにイライザ・タルカット先生の若き日、日本にこられるまでのこととお話したいと思っております。

こういうことをおっしゃった人は、私が先年研究いたしましたデフォレストさん(Miss Charlotte Burgis DEFOREST)なんですね。デフォレスト先生は、姉妹校であるところの同志社大学が新島研究を一生懸命やっているのを横から見ているんですね。そしてこの神戸女学院の『めぐみ<sup>①</sup>』に、こう書いていらっしゃいます。「我々はもっと創立者の研究をしなければならない…。どんな紙切れ一枚でもいい、ひとつこれを集めてくれ」と。そして現に図書館本館に参りますと、デフォレスト先生が集められたタルカット先生についての資料があります<sup>②</sup>。おそらく厚さ3センチぐらいになります。いろいろな雑誌のきり抜き、いろいろな人が語った思い出、またご自身が述べられた記録。それをずっと集めて、いつの日かタルカットの研究が実るようにと願われたのだと思います。

そのところで彼女が言っているのは、わたくしはそこを読んで非常に感銘を受けたのですけれども、タルカットさんは1873年に日本に来て1911年に亡くなったが、しかしその前に彼女の37歳までの歴史があると。タルカットの生涯75歳の半分は、アメリカでの若き日であったと。この若き日のタルカットを研

究しなくてはタルカットがわからぬと。わたくしも同感です。デフォレスト先生がやはり偉い人だと思うのは、そう言うただけではなくて、彼女の書簡を見ますと、実際にタルカットのファミリーと文通をしている。ところがタルカットのファミリーは、その地域にたくさん出ております。ヴァーノン(Vernon)という地域です。そこにロックヴィル(Rockvill)という町があります。それはニューヨーク州の隣りのコネチカット州です。そこには、わたくしもそこで勉強したのですが、イエール(Yale)大学があります。ニューヘイヴン(New Haven)という町です。ニューヘイヴンですよ。ヘヴン(heaven)と違う。新しい「天」(ヘヴン)のように日本人は言うんですが、ヘイヴンで、それは港なんですね。ニューヘイヴン。松澤院長もそこで勉強されたイエール大学があります。1701年の創立で、ハーヴァード(Harvard)に続いた古い学校です。そこから北に上がっていきますと、コネチカット州の州都ハートフォード(Hartford)がございます。そのハートフォードの少し東北のコネチカット川を越えて、さらに東北に15キロほどいったところに、ヴァーノンという地域がございます。非常に発展いたしまして、その北にロックヴィルという町ができます。ここがタルカット先生の出身地です。ですから、ある伝記ではタルカット先生の出身はヴァーノンになってますし、またある伝記ではロックヴィルになってます。両方ともあっているのです。その地域全体を言う時にはヴァーノンです。しかし、市制というものができます。日本にもありますけれども、資金や税金関係の特典があり、ヴァーノンの北のほうは独立し、ロックヴィルとして独立します。タルカット先生は、そのロックヴィルのご出身であります。その地域にはタルカットヴィル(Talcottvill)、それからタルカットパーク(Talcott Park)、タルカットロード(Talcott Road)というストリートもある。ですから、タルカットファミリーが、かなりその地域では盛んな活動をしたということが言えるのです。

たまたまデフォレスト先生が手紙を書かれたのは、タルカットのあるbranch(分家)でした。しかし、もう世代がかわってますから、「そんな人、知らない」という返事が来て、デフォレスト先生は非常に落胆されたようでござ

③います。そのグループ、わたくしは調べておりますけれども、タルカットヴィルを作っていた人たちは、やはりこのタルカットファミリーの分家でありまして、かなりの industrialist(生産業者)、あとで出てきますけれども紡績、特に羊毛の紡績をしていた人たちで、先生の親戚であります。資料の「はじめに」に書きましたように、今日の試みは、できるだけ禁欲して、神戸に来られた1873年以降のタルカットはこれから勉強する、あるいは知っている人はそれを大事にする、そういうつもりになって下さってですね、タルカットの少女時代あるいは青年時代、35歳までのタルカットあるいは37歳までのタルカットをおもに考えたいと思う、それが今日の趣旨でございます。その点ではちょっと忍耐をもって一緒に考えていただきたいと思います。

## 1 ルーツ

さてこのアウトラインのとおりにやりたいと思います。ルーツにはジョン・タルカット(John TALCOTT)という人がおります。この名前がよく出てくるので、どのジョンかということでわたくしどもは非常に迷うのですが、家系図を資料の一番終わりにつけました。もともとこの英国のエセックス(Essex)においてジョン・タルカットという人がドロシー・モット(Dorothy MOTT)という人と結婚したと記録にあります。そしてトーマス・フーカー(Thomas HOOKER)という、この人はまあピューリタンでそして当時の英国国教会から出てきた人なんですけれども、preacher(伝道者)としてその地域において尊敬されておりました。その人を中心に、トーマス・フーカーのグループができておったわけです。その一人がジョン・タルカットでありまして、生まれたのは1596年で、1660年にハートフォードで亡くなっております。この人にはニックネームがございまして、the most worshipful John Talcott. そういうと何か礼拝に非常に熱心であったように思いますけれども、そういう意味ではなくて、大変尊敬されていたジョン・タルカット。だから、この一団の中でもそういう名前がふさわしいかどうかわかりませんが、フーカーを中心にしたグループの中の尊敬される指導者、長老であったということは確かでございます。

ます。彼らは意を決しまして、一団となって英国を脱出し、1632年にボストンに到着しております。このことはかなりアメリカの歴史においてよく知られておりまして、ヤフーで「アメリカ」と検索し、さらにジョン・タルカットを見ますと、この家系が出てくるわけであります。

そして2年程経ちまして、ハートフォードに移住いたします。ハートフォードは、先ほど言いました、現在コネチカット州の州都です。まいりますと、非常にたくさんの高層の建物があります。「あれ何だ、あれ何だ」と、わたくし聞いて歩いたんですけれども、多くは insurance company (保険会社) なんですね。アメリカはご承知の通り非常に保険業が盛んでありまして、その中心的な町の一つです。それと同時にハートフォードが有名なのは、このアメリカにおける自由と独立、そして人権を尊重した憲法が成文化された最初の state (州) の州都ということです。わたくしはまだそこを見ておりませんけれども、ハートフォードの真ん中にモニュメントがありまして、ハートフォードの町の建設に尽力した指導者の名前が刻まれているのですね。もちろんトマス・フーカーがその一番なのですけれども、コンピューターで見ますと、わたくしの記憶が間違いなければ、確か東側だと思いますが、そこにジョン・タルカットの名前が刻まれているそうでありまして、彼はハートフォード創立の指導者として今日でも名を留めておると言えます。

その一団の人たちは、家系をたどってみますと、3つのことが、かなり確かに言えます。

第一は、非常に教会に熱心であったことです。ディーコン (deacon) という称号がそこにでています。ディーコン・ベンジャミンとか、5代目の人もディーコン。このディーコンというのは教会の役員という意味です。教会の「執事」と訳す人もありますが、教会で指導的な立場に選ばれている。任命されています。牧師ではありません。信者の中でも教会員の信頼を受けた人がディーコンになります。模範的な信者であったと、尊敬されていたと、そういう家系でございます。これが一つ。

第二に、多くは農業に従事しておりましたけれども、地域社会に非常に貢献

した。ある人は代議員になり、ある人はその町の要職にあずかるというような形で、非常に尊敬された町の指導者であったということが言えます。

それからもう一つはですね、この人たちは進取の気性に富んでいたということが言えます。進取の気性―旧態依然にマンネリ化してしまうのではなくて、自分がこの時代においてはどのような働きをすべきかということにいつも目を光らせ、考えていた人だということが言えます。その一つの例として、あとで申し上げますが、彼らが紡績の、特に羊毛の仕事に参加していったということ。彼らと言いましても全員ではございませんけれども、この家系図で7代目のラルフ(Ralph)というタルカット先生のお父さんも、資料に書いてございます、その一人です。

## 2 家 族

アメリカでわたくしと一緒にこの研究を一生懸命やってくれる、前の新潟の宣教師のジョン・ジャック・モス(John Jack MOSS)という、いろいろわたくしに本を送ってくれたり、ここに行つてこう聞いたらいいと、この墓地にはちゃんとタルカットのお母さんの名前がある墓碑があるとか色々教えてくださっている方がおられます。この家系図は、彼に送って確かめながら、一応わたくしなりに作ったものです。まだ間違いがあるかもしれない、仮のものですが、この秋にはわたくし健康が許されれば、ジャック・モスさんの指導によってそこをずっと一週間ぐらいまわって確かめてきたいと思っています。今のところはその仮の家系図で、タルカットは八代目になるわけです。そのタルカットのお父さん、お母さんは太文字ででています。ラルフ・タルカット(Ralph TALCOTT)、スーザン・ブル(Susan BULL)。このブル家というのはもっと調べると面白い。面白いといったら失礼ですけども、大変信仰の篤い祖先をもっておりまして。

スーザン・ブルとラルフ・タルカットのあいだに子どもが他に四人ほど生まれまして、一番上のエドワード(Edward)というのは生まれてすぐ亡くなります。確かその年に亡くなったと思います。それからお姉さんのスーザン(Susan)。

そしてイライザ。その下に妹さんが2人、ローラ(Lora)とマリア(Maria)がいます。イライザは1836年生まれですから、今年はタルカット生誕170周年になります。タルカットは1911年に亡くなりますから、永眠100年はもう4年、5年したら来るんですね。

さて、タルカットのお父さんのお兄さんのことを言いたいと思います。家系図の第7代目。この家はずいぶん子どもが多かったんですね。子どもが8人います。その2番目がフィニアス(Phineas)。この人は大変な企業家で、また信望のある人で、いい意味の政治家でもあり、それから社会奉仕をよくした人ですね。今日でいえば、ハンディキャップをもった人たちのハートフォードにおける institute がありますが、彼が青年時代に作ったものです。彼は1793年に生まれ、1863年に死んでおりますが、これがこのタルカットのグループの中でも紡績、特に羊毛の企業における中心的な人物であります。ラルフ・タルカットは、それまでは農業をしていたんですけれども、兄のフィニアスを助け、協力して、その紡績の仕事にあずかるわけです。それが19世紀の始めの頃、1820年前後であります。

さて全体のところに戻ります。家族ということで、今申し上げたことができます。「タルカット家の人々は勤勉に働き、神と人にとに仕え、ハートフォード近郊に移り、主として農業を営み、地方の代表として地域のために尽力し、教会には熱心に通い、役員も務めていた」。先ほど申したことが資料に記されています。

イライザ・タルカット先生の両親がいつ結婚されたか。これは教会の文書を調べるとたいていできます。わたくしもそれから調べていただいたのですが、1830年に教会で結婚しております。その教会はどういう教会であったかという、Congregational Church です。いくつか合同してしまして、あまり複雑なことを申し上げるとかえって混乱しますが、もともとその町にはファースト・Congregational Church があって、セカンド・Congregational Church と合同していったりいたしますが、とにかくCongregational Church であります。Congregational Church とは何であるかというと、

それぞれの教会、すなわち各個教会の自由と自治を認め、その信徒たちの交わりを重要視する教会です。そういう、日本語で会衆派教会と訳される教会に属しておりました。ですから、同じプロテスタントでも、長老派やメソジスト派のように、牧師の中から選ばれる監督、ビショップ(bishop)と呼ばれるような、全体を指導する人はいないわけですね。会衆、すなわち信徒から選ばれるデーンコンが中心となる。このグループのなかでは、資料にタルカットの系図で第6番のハンナ(Hannah)が、そのデーンコン・フィニアス(Deacon Phineas)と結婚しています。このハンナがエーベンゼン・ケログ(Evenzen KELLOG)という家からきているんですね。このケログという人が、この地域に50年留まって、小さい教会の牧師をしたのですね。おそらく神学校を出てすぐ行ったのではないですか、死ぬまでいたんですね。わたくしはそのケログの、どういいますか、息吹といいますか、薫陶というものを、この人たちは非常に深く受けたと思います。フィニアスはこのケログの娘さんと結婚したわけです。そういう親戚を抱えている。

さて急ぐようですけども次に移ります。それは彼女の家庭のことです。ラルフとスーザンは先ほどもいいましたように1830年に結婚し、その家庭で、3人の姉妹とタルカットの4人ですね、成長したわけです。工業化が進み、ハクナム(Hockanum)川を用いて製糸業を起こして、特に毛織物ですが、親族たちと経営にあたり、お父さんのラルフは自ら工場の内に泊まりこんで現場で経営と監督にあたったということが記されております。まあ家族経営なんですね。その写真もございますが、三階建ぐらいの工場を作って、そして近隣の村から労働力を確保した。ただ綿織物は産業的には latecomer(新参者)、遅れて始まっています。たとえばロードアイランド(Rhode Island)のプロビデンス(Providence)という町にはすでに大掛かりな綿業があります。あるいはマサチューセッツ(Massachusetts)ではそういうものはいち早く始まっていますので、タルカット家では「サティン(satin)」、絹糸と綿をまぜた毛織物を作っていました。その方が高く売れるし、かつまた少数の人で質のいい物を作りうる。そしてその労働力は近隣の村々から確保する。こういう堅実的ないき方で経営

しております。

こういう経営をする時に一番困難な、一番重荷を負う人は誰であるか。もちろん全体の資本を動かす人も重要でしょう。これは兄のフィニアスがしたんですね。そういうオーバーオールなマネージメント。それからもう一つは販売していく人。これは親戚のケログ家の人たちがやります。ラルフは何をやったかという、工場の中に住み込んで、昼間はソファアーにしているものを夜はベッドにするというような、事務所の一室に居室を設けて、そして労働者の人たちと緊密な親しい関係をもって、働いている人たちのニードを確かめ合いながら、その人たちに配慮しながら、働いた。普通の言葉で言ったら、現場監督でしょうね。ウィークエンドには帰ったと思いますけれども、彼は工場の中に泊まってそれを運営しておりました。だからかなりの部分の day-to-day といえますか、毎日の経営の重荷はラルフが負っていたといっても、わたくしは過言ではないと思います。そして日曜日は衣をかえて、みんなで、働いている人たちも一緒に教会に出席していると。

資料1 ページ目の一番下のところはヴァーノンの町の中心部の1836年頃の本④  
版画がございます。ある本の中に出ているんですけども、それを借用いたしました。これも農村の小高い山が向こうに見えまして、そして左側に教会が見えます。この教会、Congregational Church、会衆派の教会に彼らは通っていた。右側のところに見えている建物が2つございます。おそらくこのうちの1つは学校ではないかとわたくしは想像するんですけども、これはもう少し検討しないと云えない事です。とにかくこういう田園の地域においてタルカットは成長していったということが言えます。

こういう産業化が進んでいくということには、その原因があるわけですね。それは人口が増えていったということです。この地域の人口は、非常に速く増えていきます。ヴァーノンが属するトーランド(Tolland)郡の人口の増加は、1810年から1850年までの統計を見ますと、17% 増えている。しかしながらヴァーノンの地域、このタルカットのいた地域は250倍になっております。人口が増えてきますと移住する人がでてくる訳ですね。もうコネチカットでは十分



な生活ができないから我々は移住しようと。だから北のほうのニューイングランドに行くとか、それから多くの方は西の方に行く訳です。現にフィニアスとラルフは馬に乗って西の方に偵察、視察旅行に行っております。バッファローに行ってそれからシカゴに行ってますね。そして自分たちもある点では移住を一つのオプションとして考えていたと思います。人口のプレッシャーを考えて2人はそういう旅にでたのだと。しかし帰ってきて紡績業をやるというふうになっております。そういう中で家庭の生活が営まれ、きわめてピューリタンの伝統をもって質素に、規律正しく、しかし温かい家族の交わりをもって、幼少の時から宗教教育を受け、教会に通ってきた。こういう家族であったようにわたくしには推察されます。

### 3 苦 難

その中で信仰の継承という点では母スーザンの影響が非常に強かったということがいわれております。資料にちょっとまとめのようなことをわたくしは書いておりますが、この家の者に思いがけない不幸がおきます。父親ラルフは、おそらくこれは工場の現場における過労があったと思いますが、1847年4月30日、健康を害してこの世の人でなくなります。そしてお母さんはですね、1854年7月22日に亡くなってます。わたくしは自分の中で想像するのですが、お父さんをなくした時にタルカットは11歳、お母さんをなくしたときは18歳、もっとも感受性の強い時に、そして最も父と母とがそばにいて欲しい時に2人の愛する父と母をこの少女タルカットは失ったわけであります。これはタルカットだけではありません。タルカットの姉妹もそうだったんですね。そこにわたくしは、その経験というものが彼女の一つの原体験、少女時代の大きな体験だったと思います。そこでわたくしは資料に書きましたけれども、そういう機会を通して、タルカットは、わたくしは自立してやらなければならないんだと、自分のことは自分でやらなくてはいけないのだと考えた。そこで彼女は奮起して、教師となるために、ニューブリテンの師範学校、normal school に行って、先生になる修行をいたします。そして姉妹は非常に仲良し、協力し合う訳ですね。

資料にも書きましたけれども、姉妹は非常にタルカットの仕事を助け、入れ替わり立ち代り日本にやってきます<sup>⑤</sup>。また自分が困難を味わった、自分が不幸を味わったから、困難の中にある人々に対する理解と働き、自分が苦しみ寂しい思い、孤独に涙したのだから、そういう苦しんでいる人を彼女ははっとけなかったんですね。タルカットの日本に来てからの生涯を考えてみますと、ほんとうに彼女は悩み苦しみ病める人の友になり、それに仕えた人であります。その原点はやはりここにあったと思います。そして彼女は聖書の信仰によって希望をもって励んでいったということがいわれます。

資料に先ほど読んでいただいたコヘレト書の言葉を載せました。

青春の日々にこそお前の創造主に心を留めよ。

苦しみの日々が来ないうちに。

「年を重ねることには喜びはない」と言う年齢にならないうちに。

太陽が闇に変わらないうちに。

月や星の光がうせないうちに。

雨の後にまた雲が戻って来ないうちに。 (コヘレトの言葉12：1-2)

「青春の日々にこそお前の創造主に心を留めよ」。

この言葉は、わたくしはタルカットの若い時の彼女を生かした聖書の言葉であったのではないかと思います。

#### 4 ファーミントンのミス・ポーターズ・スクール

資料の2ページ目のところです。Miss Porter's School in Farmington。このポーター・ファミリーは非常に優れた気品のある、しかも知性のあるファミリーでありました。ファーミントンは、先ほどのハートフォードから少し西へ行ったところの小さい町です。人口も1万を超えていない、5千か6千ぐらいの、まあ村といった方がいいかもしれません。タルカットはそこにできたミス・ポーターズ・スクールに1847年に入学いたします。

資料の3ページ目にミス・ポーター(Miss Sarah PORTER)の写真を掲げております。きりっとした顔立ちですね、ある点ではりりしい婦人であります。彼女の兄はイエール大学の教授をし、後に学長もいたします。新島 襄は大変そのポーター学長にかわいがられたという記録がございます。その妹さんです。彼女は、私も兄さんと一緒に勉強したいというのでニューヘイヴンに出かけていくのですけれども、入学は許可されなかったんですね。それで今度はもぐりで、先生たちの家である夜の授業に参加し、ラテン語などを勉強しました。

ミス・ポーターの写真の上にあるのがミス・ポーターズ・スクールの時代におけるタルカットです(Three friends pose for a keepsake on a summer's day, From the album of Eliza Talcott, 1852)。これはミス・ポーターズ・スクールの記録の中に出てきている写真でございます。わたくしはこの学校、ニューイングランドの有力な、今日もまだ続いている女学校と、できたら年齢的に同じレベルにあたる神戸女学院中高部が姉妹校関係を結べたらいいのではないかと思います。

ミス・ポーターズ・スクールにつきましてはもう少しお話ししたいと思います。が、時間がありませんので割愛しますが、わたくしは、神戸女学院の初期の気風のかかなり多くが、ミス・ポーターズ・スクールの伝統から来ている、タルカットの勉強したその学校の様子から来ているのではないかと思います。そこではラテン語を勉強させます。Spelling をやる、reading をやり、arithmetic をやり、history をやり、composition があり、writing、chemistry、natural philosophy、rhetoric、geometry、German、そして geography、music。タルカットはextra(課外)にミュージックの勉強をしています。そして師範学校を卒業しまして、ミス・ポーターズ・スクールで何を教えているか。ラテン語とミュージックを教えています。神戸女学院の初期の記録を見ますと、音楽をやりたい者、オルガンを弾きたい者は、特別の時間を作るから申し込みなさいという encouragement(奨励)があります。タルカットもエクストラな時間を取って、多少のピアノ使用料を払って、一生懸命に音楽を勉強しております。規律も非常に厳しい学校だったと思います。ほとんど寄宿制度で温かい

雰囲気の中にも、しかし規律は非常に厳しかった。時に、わたくしは男なのでよくわかりませんが、ドレスについての code(規定)があります。最近是我々の生徒たちは非常に華美になってきている。どうぞ toilet(化粧)をシンブルにして欲しい。さりげない形にして、extraordinary(並以上)にしないでやってほしい、ということを父兄に訴えておる。当時アメリカ大統領グラント(Ulysses Simpson GRANT)の娘さんが勉強に来ます。それを受け入れるわけです。ところが、外泊は無断でするわ、派手な服装はするわ、勉強はあまりしない、ということですから、このポーター先生はいろいろそれに対して諭すんですけれども、聞き入れてもらえない。わがまま娘であつたんでしょうね。それでとうとう退校させてますね。そしてコネチカットの州知事がそれでは大統領に対して申し訳ないというので、付き添いになって彼女をワシントンまで送って行ってますね。ところが、校長先生は毅然と退校させております。あのケネディ(John Fitzgerald KENNEDY)大統領の奥さんの、有名なジャクリン(Jacqueline)もこの学校の卒業生であります。

## 5 ニューブリテンのノーマル・スクール

さて、もう時間になりましたので終わりたいと思いますけれども、彼女はそこを経て、ニューブリテンのノーマル・スクールにいきます。このごろようやくわたくしはこの学校の archivist(文書係)と連絡がつきました。1849年にできた学校であります。それから100年史がでております。そしてタルカットがどういう勉強をしたか、そして卒業したあとどこへ行ったのか、ということが記されておまして、それによりますと、1857年の卒業後2年間は、また戻ってポーターのスクールで教師をしております。それから数年、近隣のパブリック・スクールで教えております。

## 6 プリマスでの叔母の介護

そのあと彼女はおばさんの病状が良くないということで、プリマス(Plymouth)に赴きまして約10年、1863年から1873年、プリマスで古くから農家をや

っていた、このブル・ファミリーのお家に帰ります。ブル・ファミリーのところで、叔父の奥さんの介護をしておりました。そしてアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) が日本で働く女性宣教師を二人求めていると聞いた。タルカットは躊躇したあげく申し込むわけですが、私一人ではとても行けない。そこでミス・ポーターズ・スクールで勉強していたもう一人の友達を推薦いたします。できるならこの二人で行きたいと、ボードにそういうお願いするのですけれども、その肝心の自分の友人は、私はとてもミッショナリーになれないというので断られます。その結果、幸いグッドレーさんと落ち合って来られたということであります。

## 7 むすび

わたくしはタルカットの少女時代に影響を与えたものを考えてみまして、特にその当時の戦乱、南北戦争に行き当たります。それは奴隷の問題を巡る戦争でした。そして奴隷解放をした人たち。ファーミントンは奴隷解放運動の地下組織の拠点になるわけです。そして女子教育を、このポーターズ・スクールを通じてやろうとした人たち、サポートした人たち。アメリカン・ボードをおこした人たちと奴隷解放運動を支持した人たちは、ほとんど同じサークルの中にある。小さい町であったけれど、アメリカの変動期におけるパイオニア的なフロンティアな運動はここから起きているということを、わたくしは感じさせられました。

わたくしども互いに学びながら、「汝の若き日に汝の創造主をおぼえよ」という言葉を、タルカットの愛した言葉であると同時に、私たちの言葉として学んでいきたいと思います。

お祈りをいたします。

我々のこの愛する神戸女学院の founder(創立者)のタルカット先生をおぼえて、ともに礼拝をなしましたことを感謝いたします。

そのニューイングランドの変動の時に信仰が伝えられ、聖書の福音に生かさ

れて、彼女が成長していったこと、特に苦しみ悩み両親を失い、寂しさの中に信仰によって新しく生き、隣りに仕える人格が形成されたことをおぼえます。

われらの若き日にあなたの名をおぼえることができますように。

主の御名をとおして祈ります。アーメン。

(2006年5月26日)

わたしどもが敬愛してやまなかった本学院理事の竹中正夫先生は、2006年8月17日、天に召されました。ここに改めて、先生の上に天上の平安を、またご遺族の皆さまの上に主のお慰めをお祈りさせていただきます。

先生は、史料室のためにも長きにわたりお力添えをくださいました。『学院史料』への寄稿や『C・B・デフォレストの生涯』、『神戸女子神学校物語』など、本学院の歴史に直接、間接にふれるご研究を数多く発表してこられました。特に晩年は創立者イライザ・タルカット先生の評伝執筆に情熱を注いでおられ、わたしどもも期待をふくらませておりました。その完成間近とうかがっていた矢先の悲報でありました。

竹中先生は召される直前の2006年5月26日、大学の創立者記念日礼拝で『汝の若き日に』と題してご講演くださいました。それは準備しておられるタルカット研究の一部であり、学生にとっても、教職員、卒業生、関係者にとっても、たいへん有用かつ刺激的な内容でした。『学院史料』編集委員会では、お連れ合いである竹中百合子様のご了解をいただいて、その講演記録の掲載を計画しました。講演をテープ起こしした原稿が、本稿のベースとなっています。ただし、当然のことながら、基本は学生に向けて語りかける調子であり、そのままでは少々読みにくく思われました。そこで、重複箇所等の整理、前後するフレーズの組み替え、補足的な言葉の組み入れを飯が担当し、史料室の佐伯裕加恵氏に注を付していただきました。

ご講演の締めくくり部分は、定められた時間が到来し、十分に言葉を尽くせなかったかと拝察します。そこは、竹中先生ご自身に加筆、完成させていただくべき箇所、手を入れることを差し控えました。しかし先生は恐らく、タル

カットがファーミントンという町で奴隷解放の運動にふれ、そこに「創造主」の意思を重ね合わせ、日本伝道への幻へと導かれるに至った—そのような構図を思い描かれたのではないかと考えます。

本稿にもありますように、2011年にはタルカット召天百年を迎えます。わたしども、竹中先生から大きな宿題を課せられたとの思いであります。この講演記録の掲載によってタルカット研究がいつそう進展し、わたしどもが神戸女学院をさらに深く理解する契機が与えられますようにと願うものです。（飯 謙）

#### 註

- ① 神戸女学院同窓会誌『めぐみ』第63号(1916年12月30日発行)pp.7-10。
- ② “ELIZA TALCOTT FOUNDER OF KOBE COLLEGE” 1919.
- ③ 前出註②に収録されている1926年9月24日付デフォレスト先生宛 J.G.Talcott 氏書簡。
- ④ *Image of America Vernon and Historic Rockville*, Ardis Abbott and Jean A. Luddy, 1998, Arcadia Publishing.
- ⑤ 末妹 MARIA はアメリカン・ボードの宣教師ではなかったが、伝道団からの要請を受けて、姉イライザを助けるため、一時、神戸の学校で教鞭をとった(1882年1月～1883年12月)。もう一人の妹ローラは、京都・同志社で活動した日本派遣宣教師 Dwight Whitney Learned 師の父親 Robert Coit Learned 師と結婚した。姉イライザが亡くなったとき、婦人伝道会の機関誌 *Life and Light for Woman* に追悼文を寄せている(1911年1月発行pp.10-13)。

## 創立者記念日礼拝

日 時：2006年5月26日(金)10:35～11:20

(アッセンブリーアワー)

場所：講 堂

講 師：神戸女学院理事 竹中 正夫 氏

289

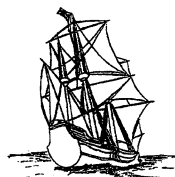
教会暦 キリストの生涯

みどりもふかき

[1122]

Ye fair green hills of Galilee

NAZARETH



信条の自由を求めて—メイフラワー号

- 1 みどりもふかき <sup>わかほ</sup>若葉のさと、  
ナザレの村は、<sup>うしろ</sup>汝がちまたを  
こころ清らに <sup>さき</sup>行きかいつつ、  
そだちたまいし <sup>ひと</sup>人を知るや。
- 2 その頭には <sup>こゝろ</sup>かむりもなく、  
その衣には <sup>ころも</sup>かざりもなく、  
ますし <sup>たて</sup>木の <sup>くさ</sup>くさとして、  
主は <sup>しゅ</sup>若き <sup>わか</sup>日を <sup>ひ</sup>過ぎたまへり。

- 3 人の子イエスよ、君の御名を  
みつかいたちの ほむるときに、  
めぐみにおいて 愛にかおる  
み足のあとを 我はたどらん。

5 わたしを苦しめる者を前にしても  
あなただけの頭に、食卓を整えてくださる  
わたしの頬に香油を注ぎ  
わたしの杯を溢れさせてくださる。

6 命のある限り  
恵みと慈しめは、いつもわたしを追う。  
主の家にわたしは預り  
生涯、そこにとまらぬであらう。

主は御名にふさわしく  
わたしを正しい道に導かれる。  
4 死の陰の谷を行くときも  
わたしは災いを恐れない。  
あなたがたわたしと共にいてくださる  
あなたの鞭、あなたの杖  
それがわたしを力づける。  
5 わたしを苦しめる者を前にしても

2 主はわたしを青草の原に休まし  
 憩いの水のほとりに伴い  
 3 魂を生き返らせてくださる。

詩編 23  
主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。  
――賛歌。ダビデの詩。



## 汝の若き日に一創立者記念日礼拝

神戸女学院大学 2006年5月26日(金)  
竹中 正夫

はじめに Eliza Talcott は1836年に米国コネティカット州ハートフォードの東約16キロ Rockvill (Vernon) に生れた。アメリカンボードの宣教師として来日したのは1873年3月で1911年11月1日、日本で永眠(75歳)。その生涯の半分はコネティカットの若い日々、ここに彼女のルーツ(根)がある。

I ルーツ ジョン・タルカットは1632年に英国から米国マサチューセッツに移住した トーマス・フーカーの仲間 The Most Worshipful Talcott と云われ尊敬されていた。そこから辿って Eliza は八代目となる。

II 家族 タルカット家の人々は勤勉に働き神と人々に仕え、ハートフォード近郊に移り、主として農業を営み、地方の代表として地域のために尽力し、教会に熱心に通い役員をつとめていた。

両親は1830年結婚 Congregational Church

父 Ralph (1795-1847)、母 Susan(1804-1854)、兄 長逝、姉 Susan(1831)、妹 Lora(1838)、Maria(1840)

工業化が進み Hockanum 川を用いて製糸業をおこし、親族たちと経営。自らは工場に泊まり込んで現場で経営と監督にあたる。母スーザンは信仰の篤い人。幼いころから宗教教育、躰、日曜日は教会に。

III 苦難 思いかけない不幸 父1847.4.30 父死す(タルカット11歳)  
母1854.7.22 母死す(タルカット18歳)

自立心を強くする

姉妹の協心戮力

困難ななかにある人々への理解と働き

聖書の信仰による希望

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。

苦しみの日々が来ないうちに、「年を重ねることには喜びはない」

と言う年齢にならないうちに、

太陽が闇に変わらないうちに、

月や星の光がうせないうちに、

雨の後にまた雲が戻って来ないうちに」 (コヘレトの言葉12:1-2)

Vernonの町の中心部 1836ごろ

#### IV Miss Porter's School in Farmington

1947入学、今日まで盛んに継承されている。

1. 場所 Farmington { ABCFM の年会 第一回  
奴隷制反対の拠点  
女子教育のおこり

#### 2. 時代 変動の時代

人口

1850 23,000,000 3,200,000

African American

1852 Harriet Beecher Stowe, Uncle  
Tom's Cabin 出版

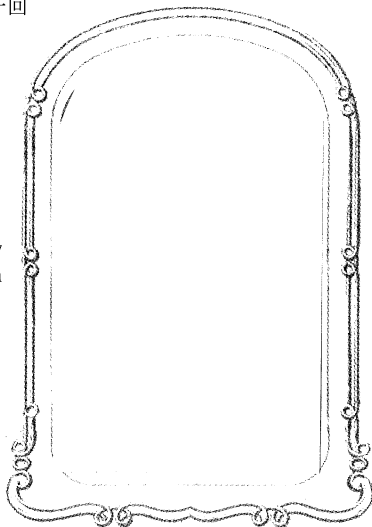
1855 Song of Hiawatha, H. W. Longfellow  
Leaves of Grass by Walt Whitman

1860 Abraham Lincoln US President

1861 Confederate States of America

| 南北戦争

1865 Lincoln is assassinated



Miss Porter's School時代の Eliza Talcott

#### V Normal School in New Britain

1849に設立 師範学校に学びいくつか

1857卒業 の学校で教える

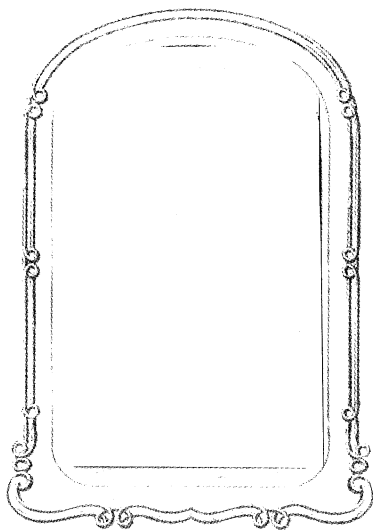
#### VI 叔母の介護 in Plymouth

1863-1873 in New England farm house

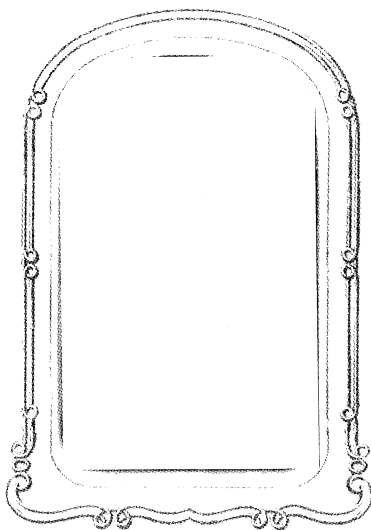
むすび

1. ニューイングランドのルーツと家風
2. 苦難のなかに
3. 自立したしんのある女性 規律ある教養のあるそして気品ある女性の形成
4. 神を信じ他者に仕えるー愛神愛隣

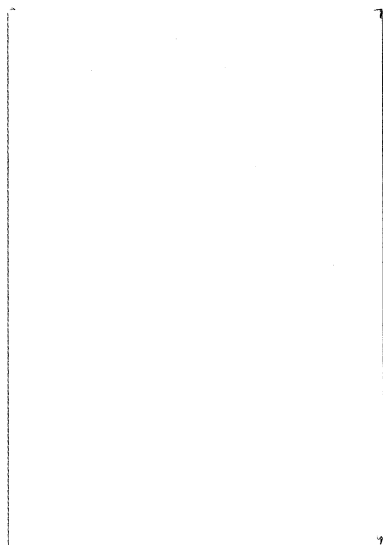
《Virtus sola nobilitat》



Three friends pose for a keepsake on a summer's day.  
From the album of Eliza Talcott 1852.



学友たちと 1852年ごろ 2列目右端



創立者 Sarah Porter



初期の校舎 Miss Porter's School

タルカット家の家系図

